

---

# PERSONA4 After ～過ぎし刻の足跡～

葵鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P E R S O N A 4    A f t e r    〈過ぎし刻の足跡〉

### 【Nコード】

N 5 8 6 7 M

### 【作者名】

葵鏡

### 【あらすじ】

アメノサギリを倒し、事件を解決した彼らのその後の物語。それぞれが辿った軌跡の記録。

このシリーズは基本、1話完結の短編集となっております。

## 花村陽介 『あの高い青空を見上げて』

相棒が稲羽を去って、俺達は3年に進級した。

クマのヤツは相変わらずあつちの世界に一人で居るのが寂しいと、家に半ば居候の状態を続けている。

まあ、親父もお袋もクマのヤツを気に入っているようなのでその辺りは問題はないのだが、アイツの生活費を俺が捻出している現状を、そろそろどうにかしたいところだ。

これじゃ、いつまで経ってもバイクの免許が取れやしねえ。

3年に進級してクラス替えはあったのだが、運が良いのか悪いのか、天城や里中とは今年も同じクラスだ。

里中のヤツは「またアンタと同じクラスなのか……」などと失礼なことを宣ってくれたが、里中なりの親愛の証みたいなモノだと解っているので、その辺りは適当に受け流してみた。

まあ、今年の担任がまた柏木なのは正直勘弁してもらいたかったけどな。

今年は卒業後の進路とか色々面倒な事が多い年になりそうだが、今のところはこれといって進路に希望があるわけではなく、ゆっくり考えていけば良いかと思っていた。

ほかの連中の事を知るまでは……

3年に進級して早々、里中の奴が熱心に勉強へと取り組み始めた。天変地異の前触れか？ とからかってみたが、里中の奴は真面目な顔をして「刑事になる為に、今更遅いかも知れないけれど勉強出来ないとね」と答えられた。

そういえば相棒と一緒に去年、カツアゲグループと一悶着あったとか言ってたっけ。

それだけが原因じゃないとは思うが、里中なりに思うところがあって刑事を目指すようになったんだな。

天城のヤツも、実家の女将修行に本腰を入れるような事を言ってたっけ。

確かインテリアコーディネイトの資格を取るとか言ってたような気がする。

俺だけが進路の展望が定まってる事じゃなかった。

クマのヤツは元々こっちの世界の住人じゃないが、今ではジュネスに無くてはならない存在になっているし、完二のヤツも月に1回、特技の裁縫を生かした編みぐるみの教室を開いているそうだ。

りせも今年から芸能界復帰の為の下準備を着実に進めている。

直斗は直斗で元から探偵として活動していたのだから、今更進路をって考えたりする訳はないか。

俺自身に何が出来て何がやりたいんだろう。

自分自身のことなのに、何一つ解っていない事が情けなく思えた。

休日。特に用事がないときは菜々子ちゃんと一緒に遊ぶことが多いのだが、ここ最近では里中が頻繁に菜々子ちゃんの相手をしている。何でも、現役の刑事である堂島さんから話を聞いているらしい。

堂島さんも最初の頃は戸惑っていたようだが、菜々子ちゃんの面倒を見てもらっている事もあってか話す機会も増え、今では刑事としての心構えなどのアドバイスをしているらしい。

それだけ里中も本気なんだろうけど……

里中、頼むから菜々子ちゃんに物騒な技を教えないでくれ。

今教えてるそれ、シャドウを吹き飛ばすときに使ってる蹴り技だろう？

ああ…… 菜々子ちゃんがもの凄く楽しそうな笑顔で練習に励んでいる。

相棒、スマン。俺には止める事はできそうにないわ……

ゴールデンウィークに入って、相棒が稲羽に帰ってきた。

相棒から向こうの様子を聞いてみたが、去年の稲羽での出来事と比べると、至って平和な日々を過ごしているとの返答だった。

ここ最近の俺達の近況や、菜々子ちゃんが里中に型を教えてもらっている事などを話したが、里中から型を教えてもらっていることは、菜々子ちゃんからのメールで知っていたらしい。

何とも微妙な苦笑いを浮かべて話していた相棒の、珍しい表情が見られたのが印象的だったな。

まあ、そんなこともあったが、良い機会かと思い相棒に進路のことを相談してみた。

相棒も今のところは進路を決めていないと言っていたが、俺とは逆でやりたいことが絞り込めなくて「いつそのこと出来ることを全部やってみようか？」などと冗談めかして話してくれた。

まあ、相棒の恐ろしいところは、それが冗談ですまない所なんだよなあ……

多芸すぎるにも限度があると俺は思うぞ？

俺の相談の方だが、相棒から「ジュネスの仕事で、稲羽に貢献できることがあるんじゃないのか？」とアドバイスを貰った。

そういえば、今年に入ってからジュネスなどの大型チェーン店が進出したことによって地域商店街の過疎化が進み、人通りが少なくなった商店街などで犯罪が横行する事が増えたとかニュースで言っていたな。

去年、相棒とカツアゲグループとの間で揉め事があったらしいが、それに関係したことなんだよな。

それから色々とその辺りのことを調べたみたが、結構あちこちで似たような状況になっているらしい。

進出してきた大型チェーン店が、業績悪化で撤退した煽りを喰らってトドメを刺した事例とか、正直笑えない問題だと思った。

今のところジュネスではそういった不安要素は無いと思うが、稲羽中央通り商店街は深刻な状況じゃないのかと思う。

そういえば尚紀から聞いた話にも、日本酒から作った化粧水の売り上げが中々伸びないというのがあったな。

その辺りに、何かしらのヒントが隠れているかもしれないな。

夏になり、りせが本格的に芸能界活動を再開した。

流石に1年のブランクは厳しそうだったが、頑張っているようだ。直斗のやつも、ここの所は探偵業で学校を時々休学している。

天城はめでたくインテリアコーディネーターの資格を取ることが出来た。

完二も編みぐるみ教室が好評で、最近ではまわり近所との交流も良い方向に変わってきているらしい。

里中はこの間の中間試験でこれまで頑張った成果を出して上位にランクインしていた。

クマのヤツはフードコートの焼き場を任されるようになって、給料が上がったことを喜んでいた。

そんな中、俺だけが未だに自分の先行きが見えていなかったんだ……

秋になり、未だに見いだせなかった俺に答えを示してくれたのは菜々子ちゃんだった。

それはある日の休日、偶々その日はジュネスでなくて丸久豆腐店に豆腐の買い出しに皆で付き合っていたことだ。

菜々子ちゃんの「ジュネスでもここのお豆腐が買えたら良いのね」という一言が全ての答えだった。

ジュネスへの稲羽中央通り商店街の店舗出店。

確かにジュネスでは専門店も取り扱ってはいるが、地元商店街の店舗を出してはいなかった。

その辺りの詳しい事は今の俺には解らないが、色々と難しい問題

があるのだろう。

取り敢えず、この案を軸にどうすれば上手く行くかを煮詰めた方が良さそうだ。

冬になり、それぞれが目指す進路への最終調整が進む中、息抜きに皆でクリスマスパーティーをする事になった。

相棒もその日は稲羽に戻ってくるそうだ。

仕事が忙しいはずのりせも、その日のオフをもぎ取ったらしく参加するとのこと。

というか、りせは本当に凄と思う。

復帰早々は色々と苦労していたようだが、今ではトップアイドルまで手が届く距離まで巻き返してきたのだから。

クリスマスパーティーは去年と同じく堂島さん宅で行われた。

去年と違い今年のケーキは既製品だったが、前もって予約を入れて注文しておいた物だからそれなりに凝った作りをしている。

味の方も、甘過ぎない味付けが俺達男性陣にも食べやすくて好評だった。

今年の菜々子ちゃんへのプレゼントは、卒業を控えている俺と里中と天城の3人でパステル調のマフラーと手袋を、クマと完二は共同で制作した手製の編みぐるみのセット。

リセからは可愛い細工の施されたブローチで、直斗は手製の多機能ペン。

そして相棒からは、菜々子ちゃんが欲しがっていた最近話題になっている絵本だった。

菜々子ちゃんの喜ぶ顔を見て、妹が居たらこんな感じなのかなと思った。

年が明けて各々の進路も確定し、卒業式まで残すところあと僅かとなった俺達。

里中は警察官への採用が無事決定し、春から警察学校での研修へ

の準備に余念がない。

天城は高校卒業後、実家での女将修行を本格的に始めるらしい。そして俺はジュネスにクマ共々採用が決定した。

ジュネスに正式採用となった俺とクマだが、実際やっていることは今までと大きく変わらない。

まあ、給料の面でまともな額が支給されることになったのが、一番大きな変更点だろう。

高校在学中、建前上は他のバイト連中と同額って言ってたけど、実際はそれよりも少なかったからな。

とはいえ、働いている時間が時間だっただけに他のバイト連中よりは貰っていたのだが、その事を全く見ずに文句を言ってくれるヤツも居たな。

主に何かと仕事をさぼりたがる先輩二名。

流石にその件で所構わず文句を言われたら他のバイト連中にも悪影響が出るので、俺の給与明細を見せてどれだけの時間を働いていたかを理解させた。

俺の時給が400円って知った時のあの二人の表情は見物だったな。

それ以降あの先輩達からの文句を聞いてない所か、少しだけ勤務態度が良くなったのには驚いた。

入社半年ほどして、高校在学中に考えてた案を親父に相談してみた。

その結果、親父からこの件に関しては俺に一任するという事で話が付いた。

ここ最近になって、ジュネスなどの大型チェーン店舗による近隣



商店街への弊害が改めて取り上げられるようになり、ジュネス全体としても近隣地域に配慮した企業展開が求められるようになっていくとかで、親父も対応に苦慮しているようだ。

それもあって、親父も俺の案に乗り気のようだ。

これが上手く行けば確かに、問題は解消されると思う。

そう樂觀していた俺は、最初の段階でこの問題が根深いことを思い知らされた。

尚紀に協力を頼み、尚紀の親父さんにコニシ酒店の出店依頼を申し込んだのだが、こちらの話を聞いて貰うどころか、カツとなった小西氏に酒瓶を投げつけられる始末だった。

幸い大した怪我をする事はなかったが、尚紀にこうなったら暫くの間はまともに話を聞いてもらえないから、様子を見て改めて話をしたいと言われた。

流石にそう言われるとこちらとしては引き下がるしかないので、後日改めてと言う事でその日はコニシ酒店を後にした。

改めて出店依頼を申し込むまでの間、商店街の他の店舗にも協力依頼の申し込みをしに行くことにした。

老舗染物店『巽屋』店主である完二のお袋さんは、俺の話を聞いて快く依頼を受けてくれた。

丸久豆腐店の店主でりせのおばあちゃんも快く依頼を受けてくれたのだが、りせの居ない今は多くの豆腐を作ることが出来ないなので、常時出店は無理とのこと。

この話を聞いて、常時ジュネスに出店して貰うのとは別に、期間限定でPR的な要素を持たせた出店も悪くはないなと思った。

その条件も加えて他の店へも出店依頼を試みたところ『だいだら』と『四六商店』以外は期間限定での出店ならという条件で依頼を受けて貰える見通しが立った。

まあ、だいだらと四六商店は扱っている商品の性質上、ジュネ

ス出店は厳しいという事なのだろう。

小西氏の説得は困難を極めていた。

ジュネスに対する反感もそうなのだが、亡くなった小西先輩の事も関係していたのかも知れない。

流石に2回目からは酒瓶を投げつけられる事はなかったが、話がこじれて持ち越しになるのが何度か続く事となった。

これまでの話の内容をまとめると、小西氏としてはジュネスで自分達商店街側の店舗を出店させる事に対するジュネスのメリットが見えない事。

ジュネスに出店する事による商店街側のメリットが俺の言うように本当にあるのか、また出店する際に掛かる費用が結果として足を引っ張らないのか？

主立った問題はこれくらいか。

商店街側の出店については、新たな客層の獲得になればと云う思惑もあるが、それよりも商店街が活性化する事によって稲羽が賑わうようになればという思いのほうが強いの。

商店街側のメリットは、確かにやってみなければ解らないという側面があるがその辺は宣伝の仕方でどうにか出来ると考えている。

出店費用については正直な所、規定額を払って貰うのではなくて当日売り上げの1割とかを考えている。

ジュネスに商品を常時置くなら、一割引いた価格で全部買い取りでも良い。

結局の所、商店街のPRになる事の方が一番の目的なのだから、先行投資と考えれば問題はないだろう。

後考えられるのは、俺のような若造が出店依頼の担当者ってのが一番の不安要素なのかも知れないな。

他の所で依頼を受けて貰えた理由だって、俺の功績というよりは完二やりせという身内からの後押しがあつての事だし、四目内書店や愛家、惣菜大学は相棒が常連客だった事で俺のことをついでに覚

えてくれていた事が理由だ。

ここに来て、相棒の顔の広さに改めて驚かされる。

何度目かになる小西氏との交渉。

「ワシも頑固な方だが、アンタも相当に頑固だな」

小西氏は、今までに見せたことのない苦笑いを浮かべて俺に話しかけてきた。

「どんな状況でも諦めない親友がいますからね、そう簡単に諦める真似は出来ないですよ」

そう、昔の俺だったらすでに諦めていただろう。

だけど、そんな俺を相棒が変えてくれたんだ。そんな相棒に報いる為にも簡単に諦める訳にはいかないし、この企画は絶対に成功させなければならぬ。

「なるほどな。ワシも一度、その親友とやらに会ってみたくなったよ」

今までの態度からすると、随分と柔らかくなった小西氏に俺は面食らう。

そんな俺の表情から察したのか、小西氏は苦笑いを浮かべた。

「最初はジュネスへの反感もそうだが、交渉に来たのがアンタみたいな若造だったからな。本気でワシら商店街の店舗出店を考えているのか判断が付かなかったんだよ」

小西氏の言葉に「ああ、やっぱりそうか」といった思いが過ぎる。

「だが、尚紀に言われたんだよ。『親父に酒瓶をぶつけられたにもかかわらず、花村さんが何度も足を運んでくれたのが本気である何よりの証拠だろう』ってな」

小西氏はそう話すと、何ともバツの悪そうな表情で言葉を続ける。

「息子に言われるまで気付かなかったのが恥ずかしいよ。確かにいい加減な気持ちで来ていたのなら、酒瓶をぶつけられた最初の段階で諦めている筈だったよな」

そう言って小西氏は俺に頭を下げる。

「今更だが、本当に済まなかった。頭に血が昇ったとはいえ、自分の子と同じ年頃の相手に対して取る行動じゃなかったな」

「ちよっ、頭を上げてくださいよ。大した怪我もしなかったですし、小西さんからすれば疑っても仕方がないんですから」

俺は頭を下げた小西氏に慌てて言葉を掛ける。

その後、俺達はこれまでの事についてはお互いに水に流すという事で合意して、これからの事について話し合う事にした。

「……と、いう方向で行こうと思ってますので小西さんの危惧については、これで解消できると思っています」

俺は考えていた小西氏の問題点に対する対処法についての説明を行った。

「それだと、そちらの方のメリットが殆ど無いと思うのだが、本気

なのかい？」

「ええ、本気です。これが上手く行けばその後の流れ次第で元は取れますし、商店街側も活性化すれば結果として稲羽全体として活気づくと考えています」

「ワシらと違ってアンタは都会から来た人間だ。なのに何故そこまでやろうとするんだい？」

俺の説明を聞いた小西氏が心底不思議そうに俺に尋ねてくる。

「正直に言うと、こっちに来た当初は何もない所だなんて思ってたんですよ。でも、色々な事があって……仲間達と共に過ごしたここが、今では大好きなんですよ」

俺の言葉に小西氏が「そうか」と小さく頷く。

「花村君といったか。つかぬ事を聞くが、早紀……娘のジュネスでの様子はどうだったかね？」

小西氏の突然の質問に、俺の思考が一瞬止まる。

俺がこの町に来て初めて優しくしてくれたのが小西先輩だった。

本心では俺のことを嫌っていたのかも知れないけど、それでも俺にとっては良き先輩だった。

あの人のジュネスでの働きぶりを思い出す。

適当に見えて、その実すごく真面目だった事。

口は悪かったが優しくかった事。

「一見適当に見えて、その実すごく真面目な人でした。商品の並べ方とか、どうすれば客の目に付き購入してもらえるか、どういった

商品が売れるのかとか、いつも真剣に考えていましたね」

当時のことを思い出して話す俺の目の前で、小西氏は両手で顔を覆う。

「そうか、早紀は店のことを本当に考えていたんだな。それなのに、ワシは……ワシは……」

小西氏はそう呟くと嗚咽を漏らす。

「娘の言葉をろくに聞かず、世間体ばかり気にして……ワシは、父親失格だ」

「小西さん……」

マヨナカテレビで小西氏と小西先輩のやり取りを聞いたときは憤りを覚えたが、こうして目の前で嗚咽を漏らす小西氏の姿を見ると、小西氏も相当辛かったんじゃないのかと思えた。

仲違いして、和解する前に死別して……

俺なんかと違って、どれだけ悔やみきれない日々を過ごしたんだろう。

「小西さん。俺、思うんです」

だから俺は、小西氏に伝えようと思ったんだ。

「小西先輩は居なくなってしまったけれど、俺達が小西先輩のことを忘れずに、彼女が誇れるように生きていけばきっと、天国で笑っていてくれるんじゃないかって」

俺の言葉に小西氏は顔を覆っていた手を離す。

「だからって訳じゃないですが、お願いします。俺に力を貸してください」

そう言っ俺は小西氏に頭を下げる。

「頭を上げてくれないか、花村君」

頭を下げる俺の肩に手を置き、小西氏が話しかけてくる。

「君の想いは解った。ワシで良ければ、君に協力させてくれ」

小西氏の言葉に俺は反射的に顔を上げる。

顔を上げた俺の視線の先には、先ほどまでとは別人のような小西氏の姿があった。

「ありがとうございます。こちらこそ、よろしくお願いいたします」

こうして俺は小西氏の協力を得て、ようやく商店街店舗のジュネス出店のスタートラインに立てたのだった。

数日後。

ジュネスの会議室に、出店に協力してくれる商店街の人達が集まっていた。

「本日はお忙しいところ、朝早くからお集まりいただきありがとうございます」

「ございます」

俺の言葉に集まってくれた人達の視線が集まる。

その視線を前に俺は今回の企画についての概要と目的、出店する期間や順番等の説明をおこなう。

時間が掛かると思われた打ち合わせだが、小西氏や完二のお袋さん、りせのおばあちゃん達の取り成しもあって問題なく打ち合わせは進んだ。

「最後になりますが、今回の企画について一つ留めておいて欲しいことがあります」

打ち合わせも無事に終了したところで、俺は集まってくれた商店街の人達にそう前置きして一番大事なことを伝える。

「今回の企画は一度や二度で効果が出ないと思います。ですが、最初の一步を踏み出し継続することによって、必ず効果が出てくると俺は思っています」

そう、この企画はすぐに効果が出るような企画じゃない。

地道に宣伝し、訪れるお客に強く印象づけていかなければならない。

「ですからどうか、企画が成功するその時まで皆さんの力を俺に貸してください」

そう言葉を括り、俺は集まってくれた商店街の皆に頭を下げる。

そんな俺を商店街の皆は優しい目で見ていた。

「そんなに気負わなくても良いんだよ。あたしらも商店街の為に協



力させてもらってるんだからね」

「そうですよ。陽介君だけでなく、私達全員でこの企画を成功させましょうね」

そうだ、俺一人が頑張るんじゃない。ここにいる全員で、この企画を成功させるんだ。

こうして稲羽御当地名品と銘打った、稲羽中央通り商店街活性化に向けての活動がスタートした。

ジュネスの一角に特設コーナーを設けて開始した稲羽御当地名品だが、予想通り芳しくない結果からのスタートとなった。

とはいえ、無関心って訳ではなかったから今後の宣伝活動などで少しずつ流れを作っていけばいいだろう。

クマにも手が空いているときは、こっちの手伝いを頼んだ。

あんな性格はしているが、あれでなかなか客受けは良いからな。

企画を始めてから半年が過ぎた頃。

異屋の商品を出店している期間中、完二に協力を頼んで編みぐるみ教室も一緒に開催してみた。

完二は八十神高校を卒業後、家業の手伝いの傍ら実家で染め上げた染め物を使用した独自のマスコットを制作。

菜々子ちゃんを始め俺達にも完成記念とかでいくつか渡されたのだが、その内に一つをりせがテレビに出ているときに話題になり、口コミで評判が広がったそうだ。

その事もあってか、完二の事を知る現在の八十神高校の女生徒達の間では、完二の作る編みぐるみがブームになりつつあるそうだ。

聞いた話だと完二自身にもファンの子が出来てるそうだ。

何でも恐そうに見えてその実、純情で優しい所が可愛いとか。

好かれる事は良い事だと思うが『可愛い』って言われるのは正直微妙なところかも知れないな。

そう言う流れもあって、完二の編みぐるみ教室ジュネス出張所は人気が高く宣伝効果としては申し分がないと思う。

他の店舗も評判が出てきて、良い方向へと向かっていると思う。

常時商品を置く事が出来ない丸久豆腐店の豆腐も、その事が逆にレアものという認識を持たれてか即日完売するペースが最も早い。

ただ、これではジュネスでここの豆腐を買いたいと言っていた菜々子ちゃんの希望が流石に無理になるので、前もって菜々子ちゃんへは連絡を入れて取り置きするように手配する事にした。

職権乱用ではあるが、この企画のヒントをくれた菜々子ちゃんへ対するお礼なので問題はないだろう。

コニシ酒店の商品に関しては、化粧品と酒を分けてジュネスにて常時取り扱い商品とする事でこの企画の主軸となっている。

元々コニシ酒店でのみ扱っている、幻の芋焼酎『森乱丸』をジュネスでも少数扱うようにした所、口コミで全国の芋焼酎愛飲家からの問い合わせが一時殺到したのは正直驚いた。

対応としてはジュネスでは量を扱っていないので、コニシ酒店の方へと問い合わせてもらうように誘導するようにしている。

日本酒から作った化粧水の方は稲羽では知名度が低かったが、今では外から来るお客の口コミの効果もあってか順調に売り上げを伸ばしている。

こちらの方も少数を扱うようにして、問い合わせがあるとコニシ酒店の方へと誘導している。

稲羽中央通り商店街の方も、ここ最近の所は外から来るお客さんが増えたとかで活性化への兆しを見せ始めている。

この調子なら1〜2年もあれば目標が達成できるかも知れない。

目標を達成しても、企画自体は続けていく予定だ。

晴れ渡った青空を見て思う。

ジュネスと稲羽中央通り商店街が協力している姿を、小西先輩に見せたかったと。

先輩が居なくなり3年が過ぎたけど、俺達是这样やって頑張っている。

これからも大変な事があるだろうけど、こうやって皆で協力すればきっと上手く行くだろう。

だから小西先輩、天国から俺達の事を見ていてください。

先輩が誇れるように、俺達は精一杯頑張っていくから。

2010年07月16日 投稿

## 久慈川りせ 『飛翔、再び』

先輩が稲羽から去って2年生へと進級した私は、本格的に芸能界復帰への準備を開始した。

たった1年のブランクでも、この業界ではそれまでの人気を取り戻すのは容易ではない。

あの時に全部を失ってしまったけれど、また一から作り直せばいい。

手紙をくれたファンの女の子にもう一度、私が活躍する姿を見て欲しい。

傍にいて力になってくれた先輩や、どちらの私も私だと言ってくれた菜々子ちゃん。

失した後で見つけた私の宝物……

最初の関門は事務所に戻り、復帰を認めてもらうことだった。

あれだけの啖呵を切って出ていったのだから、そう簡単にいくとは思ってない。

予想通り、かなみの売り込みに力を注いでいる社長達は難色を示した。

そんなことで諦める私じゃない。

頭を下げて食い下がり、社長達が根負けして何とか復帰を認めさせることに成功した。

条件として、仕事は自分で探してくること、事務所の方ではこれまで通りのサポートは行わない。

かなみの事があるので仕方がないとその条件を飲んでの復帰だったのだが、その時の私は一人で全てを行うことの大変さ樂觀視してたんだ……

一人で仕事を探すというのは実に変なことだった。

仕事の募集や役のオーディションはまず事務所宛に来るのだが、事務所側からのサポートが無い私はそこから回してもらうことが出来ない。

私が休業している間にかなみの売り込みが進んでいたため、当時の関係者に当たっても仕事を紹介してもらうことは厳しかった。

こうして一人でやってみて、初めて井上さんの存在のありがたみが解った。

分刻みでのスケジュールに色々と思うところがあったけれど、井上さんや事務所の助けがあつてこそだったんだ。

その事が解っただけでも、私にとっては良い経験になったのだと思う。

本当、私って何にも知らなかったんだな。

学校が終わると仕事やオーディションを探す日々も数ヶ月が過ぎ、季節は夏になっていた。

ゴールデンウィークに皆や先輩に再会してやる気を充電してきた私は以前、仕事でお世話になった風見響子さん<sup>かざみきょうこ</sup>と再会した。

「りせちゃん、久しぶりね」

「ご無沙汰してます、響子さんもお変わり無さそうで」

風見響子さん。

中高生向けのドラマなどを手がける女性監督さんで、学園モノなどを手掛けると右に出る者が居ないほどの実力者だ。

「そう言えば現場復帰したそうだけど、大変そうね？」

「そうですね。正直に言うと、独りで仕事を探すのがこんなに大変だとは思いませんでした」

響子さんは私がデビューして最初のドラマ主演が決まったときの監督さんで、それ以来の関係だ。

最初に彼女と仕事をしていなかったら、私は演技をすることが今ほど得意になっていなかったと思う。

「そう……やはりブランクが出来てしまうと何かと不便するわね」

「響子さんは打ち合わせの帰りですか？」

出来ればこの話題は続けなくなかったので、話題を逸らすために響子さんに訊ねてみる。

「打ち合わせというか、オーディションの帰りね。今度、特別ドラマの監督をやることになってね、その役者探し」

響子さんの話しによれば、今度の特別ドラマではテニス選手を目指す主人公ヒロインの物語らしい。

事故で肘を痛め、医者からは手術をしても完璧に治らないと診断される。

その事で一度は挫折するが、そこから立ち直るという内容だ。

「主役などの主立った配役は決まっているのだけど、どうしても一人決まらない役があってね……」

「どんな役なんですか？」

私が質問すると、響子さんは私の顔をじっと見つめ何やら考え込んでいたようだった。

「……そうね……りせちゃんなら、いえ……りせちゃん以外は」

「……響子さん？」

「あつ、ごめんなさい。ねえ、りせちゃん、一つやってもらいたい役があるのだけど、良いかしら？」

「はい？」

響子さんからの突然の申し出に、私は啞然と答えるしか無かったのは仕方がないことだと思う。

（まさか、こういう事になるなんてね……）

響子さんからのお願いは、私に特別ドラマの決まらなかった役をやってもらいたいと云うことだった。

（それに、まさか主人公が……）

それだけでも驚きだったのだが、まさかヒロイン役がかなみとは、なんの冗談かと思った。

もっとも、それは向こうも同じだったらしく井上さんは困惑した表情をしていたし、かなみは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をしていた。

「りせちゃんにやってもらいたい役はね……」

響子さんの説明によると、私の役は医者 of 診断に絶望したヒロインがテニスラケットを投げ捨てたところ、それを拾ってヒロインに手渡す役だという。

その役は、自身も病気で足が麻痺しており手術で切断しなければならぬらしい。

それでも絶望することなく、前向きに生きる姿を見てヒロインが立ち直るといった内容だ。

私の出番はそのワンシーン。ヒロインが投げ捨てたテニスラケットを拾って手渡すだけで、台詞も「はい、これ」と数言だ。

それでも私はこの役を受けることにした。

何もしないよりは遙かに良い。ほんの僅かな時間だけど、演技をする事が出来るのだから。

私の出番の撮影当日。

現場に早くから入った私はある準備に取りかかった。

「おはよう、りせちゃん……それは、何？」

「おはようございます、響子さん。これですか？」

響子さんが言ったそれとは、私が膝を曲げ、足首と太ももを紐で縛っている事なんだと思う。

「私の役は、病気で足が麻痺した役ですよ？　ですから、その感覚を掴もうと出番までこうしていようと思って」



私の説明に響子さんは一瞬呆れた表情をしたが、すぐに満面の笑みを浮かべてくれた。

「そう。りせちゃん、前に比べてすごく生き生きとしているわね。休業中に何かあったの？」

「色々と大切なことがありました」

響子さんの質問に私がそう答える。

稲羽であったことは本当に私にとっては大切な出来事だったと思う。

「なるほど、りせちゃんの出番、期待しているわよ？」

「ハイッ！」

りせちゃんの本番の前に、私は撮影スタッフにある指示を出していた。

「監督、カメラの準備が完了しました。いつでも大丈夫です」

「そう、ありがとう」

準備が整ったとの報告を受けた私は、撮影開始の合図を送る。

本来の予定には入れてなかったが、今朝のりせちゃんを見て良い映像が取れると確信してのことだ。

1年のブランクがあるとは思えないほど、彼女の気力は充実していた。

思えば初めて一緒に仕事をした時も、彼女は他の役者達から抜きん出ていた。

場の空気を読む勘の良さ、与えられた役をただこなすのでは無く、自身の解釈を加えての演技力の高さ。

何より、彼女の瞳だ。

彼女の瞳は、人を惹き付ける輝きを持っていた。

あれは天性のモノだが、彼女は才能に溺れることなく努力を惜しまなかった。

あの若さであれだけの実力を発揮するのは並大抵の事じゃないだろう。

本音を言えば”真下かなみ”ではなく”久慈川りせ”をこのドラマの主人公にしたい位だ。

それ程までに彼女達の実力には差があるのだ。

とはいえ、りせちゃんが休業していた間に決まった事だから配役を替えるわけにもいかず、偶然を装って彼女に仕事の話を持ちかけたのだ。

真下かなみは決して下手な役者ではない。

しかし、どうしても役を演じようとするために粗が目立つ。

今もそうだ。

りせちゃんの演技に吞まれてしまっている。

「す、凄い……」

カメラマンの驚嘆する声が聞こえる。

それもそうだろう。

真下かなみ演じるヒロイン”宮永ゆう”が投げ捨てたラケットを、久慈川りせの演じる”少女”が拾い届けようと階段を上っていく。

しかし、それは演技には見えないのだ。

病気で不自由になった足を引きずり歩く様が、額に汗を流し必至に階段を上る姿が本物に見えるのだ。

彼女が今朝、自身の足を紐で縛っていたのはこの演技のためだったのだ。

たったワンシーン。

ただそれだけのために彼女は自身の足を縛り、足の感覚を本当に麻痺させたのだ。

彼女が階段を上りきり、ヒロインへとラケットを差し出す。

「はい、これ」

『カット!!』

撮影が終了し、スタッフの緊張が解ける。

「りせちゃん、OKよ。お疲れ様!」

「ありがとうございました!」

私の言葉に、りせちゃんが満面の笑みを浮かべて返事を返す。  
本当、休業中に彼女に何があったのかが気になるわね。

撮影は一発OKだった。

久しぶりの演技だったけれど、思ったほど勘は鈍ってなかったよう  
うで安心だ。

このドラマは来月放映される予定なので、後で皆にメールで連絡  
しようと思う。

そう。

このとき私は気付いていなかったのだ。

かなみが私に対して敵愾心を抱いていたことに……

ドラマの放映を観て私は驚いた。

私の役は名前のない、言ってみれば端役だったはずだ。

それなのに、今テレビに映っている私が出たシーンでは、私がアップで画面に出ているのだ。

画面を分割して、かなみが演じるヒロインが私の演じる少女の姿に吞まれている姿が映し出されている。

私とかなみの姿と一緒に、または交互に映すことによって、自身の境遇に絶望していたヒロインが立ち直る切っ掛けになるように演出されている。

本来だったら私の姿はラケットを拾うところと、階段を上りきりヒロインにラケットを手渡すだけのはずだ。

それが、ラケットを拾ってから階段を上りきるまで、そしてヒロインにラケット手渡すまで私が画面に映っている。

啞然とする中ドラマは進み、いつの間にか終了していた。

ドラマが終了して少ししてから、メールが複数届いた。

稲羽の皆からだ。

内容はどれも私の出番に関することだ。

私自身、皆にはほんの少しだけしか出ないからと連絡したのに、いざ蓋を開けてみればアップで映っていたのだから、皆以上に私が驚きだった。

皆からのメールを読み終えるとほぼ同時に、携帯電話の着信音が鳴る。

携帯の着信画面を見ると、相手は先輩からだった！

「はいっ、りせです！」

『久しぶり、ドラマを見たよ。端役と言っておきながら凄く重要な役所で驚いたよ』

「本音を言うと私もビックリですよ。私だってこんな風に演出されてるなんて思わなかったですから」

久しぶりに聞いた先輩の声は懐かしく、嬉しきでどうにかなってしまいそうだった。

その後、先輩と他愛ない話を続ける。

電話を切る間際、先輩から気になることを言われた。

『りせ、このドラマが切っ掛けで色々忙しくなると思うが、何か困ったことがあればいつでも連絡してくれ。決して一人で悩みを抱え込むな』

「もう、先輩ったら心配性ですね。大丈夫です、真っ先に先輩に相談しますから！」

そう言って先輩との電話を切った私は、久しぶりに良い夢が見られるような気がした。

それから、先輩が言った通りの事が起こった、

あのドラマを観た関係者から私個人に対してオファーが来るようになったのだ。

とはいえ、私自身のスケジュールは私が管理しているので全部の仕事を受けることが出来ない。

せっかく私個人を指名してくれたけれど、事情を説明して私がやりたいと思った仕事を受けることを了承してもらった。

以前と同じように、分刻みのスケジュールは流石に私だけでは管

理できない。

先方もその事は理解してくれているのがせめてもの救いとも言える。

もっとも事務所の方に、以前のようにマネージャーを付けないのかと打診があったみたいだけど社長は誤魔化していたようだ。

やりがいのある仕事を選び、一つ一つ着実にこなしていたら、いつの間にか時間は過ぎ私も高校3年で卒業を控える身になっていた。先輩は高校卒業後、持ち前の多才な特技を生かして今は海外で仕事をしているそうだ。

仕事の内容は聞いていないが、私も含めて皆には定期的にメールで近況が届いている。

この頃になると、私も自信のスケジュール管理も大分できるようになり、これまでにやったことがないタイプの仕事にもチャレンジするようになった。

でも……

この頃から私の周りで奇妙なことが起こり始めたのだ。

それは小さな異変だった。

以前から私を妙に敵対視するようになったかなみが路線から外れた仕事をするようになった。

中学を卒業して、高校に進学したからだと言えばそれまでなのだが、事務所の方針にしては違和感がある。

私の方は、あの事件を経験したことが影響しているのか、落ち着いたキャラクターという認識が定着したため、以前よりも人気が上がっている。

そのせいか依頼が来る役柄も明るい女の子から、落ち着いて一步引いたところから皆を引っ張っていくといった役が増えてきた。

これは先輩を意識して役作りをしているので、これもあの時の経験が生きているのだと思う。

そんな中、私に来る仕事の量が徐々にだが減ってきたのだ。

最初は気のせいだと思っていた。

だけど、私自身が失敗をしたわけではないのに仕事の数が減ってきてみると、流石に作為を感じる。

それとなく調べてみた結果、事務所の方が関係各位に手を回しているようだった……

「社長、いくら何でもやりすぎです！」

「うるさい！ これ以上かなみの人気を落とすわけには行かないんだっ。かなみに一体どれだけ注ぎ込んだか、貴様にも解っているだろう！」

ある日、偶然聞いてしまった社長と井上さんのやり取り。

「しかし、だからといってりせの仕事を減らすよう工作するなんて間違っています！ りせもウチのタレントなんですよッ！！」

「……貴様、そんな事をいえた口なのか？ 貴様がかなみを上手く使わないから人气が低迷してきたんだろうが。いや、それよりも……」

それは、信じられないやり取りだった。

「そもそも貴様が、りせの手綱をしっかりと握っておかなかったからこうなったんだろうが！」

「……それはッ!？」

「貴様にもりせと同じ年頃の娘が居たよな? 進学を控えて何かと入り用だよなあ? 良いのか、儂に刃向かうような真似をしても?」

デビューした私を可愛がってくれた社長の言葉とは思えなかった。井上さんも家族のことを持ち出されたせいとか、強く反論することが出来ない……

私は、目の前が真っ暗になるような思いだった。まさか、自分の所属する事務所からの妨害に遭っていたなんて……私は社長達に気付かれないようにそっと事務所を出ると、ぐちゃぐちゃになった頭を整理するために自宅へと戻った。

何もかもが信じられなくなった。

信じていた社長からの裏切り行為。

井上さんも自身の家庭があるから、社長に逆らうことは出来ないだろう。

芸能界に復帰して2年目の私に立ちはだかった大きな壁。

(決して一人で悩みを抱え込むな)

脳裏にあの時の先輩の声が甦る。

(そうだ、先輩は困ったときには連絡してくれと言ってくれたじゃないか!)



私は携帯電話を取り出すと、震える指先で先輩へと電話を掛けた。

『はい、神楽です』

「……せ、んぱい……」

『りせか？ 何かあったのか』

先輩は私の声を聞いてすぐに私に何かがあったことを悟ってくれた。

「……先輩、私を……助けて」

余程と気が弱くなっていたんだろう。

先輩の声を聞いて安心した私は涙を止めることが出来ないまま、先輩に事情を説明した。

私が全てを話し終えるまでの間、先輩は何一つ聞かずに私の話を最後まで聞いてくれた。

『りせ、次の仕事はいつだ？』

「さっきも説明したけど、今のところは未定状態だよ」

『そうか。明日、日本に帰国する。今後のことについては会って話をしよう』

先輩が来てくれる！

そう考えただけで私の体に力が戻ってくる。

「うん、待ってる。出来れば迎えに空港に行くから、到着時間をメ

ールで送ってね」

『解った。それじゃ明日』

そう言って先輩は電話を切った。

先輩が帰ってくる。私は帰国した先輩にひどい顔を見せないように今日は早く休み、体調を整えることにした。

先輩からのメールにあった時間に私は空港へと到着し、出口で先輩を待つことにした。

出口をボンヤリと見ていた私の視線の先に、懐かしい人影が映る。

「先輩っ！」

ロビーに出てきた先輩へ私は駆け寄り、先輩に抱き付く。

「へえ、鏡也も中々やるわね」

その声に私が声の主の方へと視線を向けると、そこには先輩より少し年上、20代前半くらいの女性が居た。

「ッ!?!……先輩、こちらの方は？」

私は慌てて先輩から離れて女性のことを先輩に尋ねる。

「自己紹介がまだだったわね。私は神楽凜鏡也かぐらりんの母親よ」

自己紹介をする女性の言葉を理解するのに、少しの時間が掛かった。

えっ？ 今この人はなんて云ったの？ 先輩の……母、親？

「えええええッ!？」

嘘、どう見ても子供がいるように見えない！ それどころか先輩と並んで立つと姉弟にしか見えない!？

「あっははははは、やっぱり普通は驚くわよねえ。でも、これは本当のことだから」

女性、凜さんはカラカラと笑うと私へと見事なウィンクをしてくれたのだった。

「なるほど、ね。つまり、りせちゃんの人気を妬んでの妨害仕事を事務所側がやっていたと云う訳ね」

「しかも、りせにマネージャーを付け無いどころか一切のサポートもしていないとは、質が悪いな」

私からの説明に凜さんと先輩が渋い表情で話す。

「りせちゃん、三日ほど時間をもらっても良いかな？」

何かを思い付いたらしい凜さんが私に尋ねてくる。

私の方は特に急ぎの用事がないので、凜さんの申し出を受けることにする。

でも、凜さんは何をする気なんだろう？  
私の感じた疑問は三日後に解ることになる。

「それで、母さんは情報を集める気なんだろうけど、俺は何をした  
ら良い？」

三日後にまた会う約束をしてりせちゃんと別れた私達。  
りせちゃんの視線を気にしなくて良くなったところで鏡也が声を  
掛けてきた。

我が子ながら良い勘をしている。

「事務所周りの情報は私の方で調べるから、アンタは事務所内の人  
間関係の流れを調べて。誰かが接触しているはずだから」

「解った。葛葉としては、今回の件をどう見ている？」

「罠の可能性も考慮に入れているわね。まさか、連中から泣きつい  
てくるとは思わなかったし」

鏡也から稲羽で起きた事件のことは聞いているので、彼女にちゃ  
んと説明しても良かったのだけど、今回の相手は勝手が違う。

正直、相手の力は未知数なのだ。

話を聞く限りでは、人の持つ欲望を増幅させて歯止めが利かなく  
なっているように見える。

このまま行くと周囲にまで呪力感染が拡大する可能性が極めて高  
い。

そうになったら最悪、この地域が丸ごと異界化して境界を越えて手  
に負えない魔神達がこちらの世界に干渉してくることになる。

だからこそ、私とワイルドの使い手である鏡也が派遣されたのだ

から……

――三日後

「初めまして。葛葉商事コンサルティング部門所属の神楽凜と申します。今回、そちらに所属している久慈川りせ嬢の件でお伺いしました」

私を伴って事務所へとやって来た凜さんは、そう切り出して社長と私の処遇を巡って争うことになった。

凜さんの社長とのやり取りは私から見ても、まるで魔法の様な光景だった。

社長達が私に対して行ってきた行動の問題点を列挙して、私に対してどれだけ不利益な行動をしていたのかを詳細な資料を基に説明していく。

どこから資料の基となる証拠を集めてきたのかは解らなかったが、事細かな資料内容に社長の顔が蒼白になるのを見れば、資料内容が正しい事が解る。

「こちらとしては裁判所に提訴してもよろしいのですが、どうでしょう？　彼女をこちらの事務所から独立させることで和解しませんか？」

凜さんの言葉の裏には、裁判沙汰になれば間違いなく多大な損益が出るぞという脅しが含まれているのが解った。

社長としてはここまでの証拠を押さえられているため、凜さんの要求を呑む以外になく、力ない表情で私の独立に関する誓約書にサインを入れることとなった。

事務所を後にした私達は、今後の事を決めるために喫茶店へと移動した。

「あの……凜さん、ありがとうございました」

私ひとりだったら、このまま潰されていたろう状況を打破してくれた凜さんにお礼を述べる。

「お礼を言うのはまだ早いわよ。むしろこれから大変なんだから」

確かにそうだ。事務所から独立したため、本当の意味でこれからの行動を決めていかなければならないのだ。

先行きの見通しが全く立っていない私の表情を読み取った凜さんは、カラリといった笑みを浮かべると、驚くべき内容を私に語った。

「ま、りせちゃんの次に所属する事務所はもう用意済みなんだけどね」

「……えっ!？」

「というか、りせちゃんの個人事務所と言った方が正しいかな。軌道に乗るまでは私が経営の面倒を見るし、りせちゃんのマネージャーは鏡也がやるから」

「えっ? ええええッ!？」

正に青天の霹靂だ。

私から話を聞いて数日の内にそんな準備をしていたなんて……資料集めだけでも大変だったはずなのに、いつの間にそんな準備

までやっていたんだろう。

困惑する私をよそに、凜さんは先輩と今後の方針についての基礎方針を固めていく。

## ――結果

私は新しい事務所での再スタートを迎えることとなった。

先輩が私のスケジュールを全て管理してくれるお陰で、私は自身の仕事に専念することが出来た。

新しい環境で充実した日々を過ごしていたある日、かなみが過労で入院したとの報道があった。

私が独立した影響で、かなみが無理を続けたのではないかと気になったが、先輩は別の事情からだと言ってくれた。

ひょっとすると先輩は何か知っていたのかも知れなかったが、先輩が心配しなくても大丈夫だと言ってくれたので、その言葉を私は信じた。

高校も無事卒業した私は、1年ほど日本を離れアメリカに活動拠点を移すこととなった。

私が独立して個人事務所を構えた事と先輩が私のマネージャーとして表に出てきた事により、マスコミから注目を集めたのが原因の一つだ。

先輩と私が二人で仲が良さそうにしていると、週刊誌にスクープされたときは、稲羽の先輩達から確認の連絡がひっきりなしに続いて大変だった。

後になって、それも良い思い出になったけれど、先輩達が心配するような関係には結局はなることがなかった。

アメリカでの経験はとても貴重だった。英語が出来なくても先輩

が通訳してくれるから困ることはなかった。

けれど、ファンになってくれた小さな子供達からの言葉が解らなくて、悔しくて申し訳ない気持ちで一杯になった私は、先輩に英語を教えてもらうことにした。

付け焼き刃でどれだけ出来るのか不安があったけれど、先輩は大丈夫だと言ってくれた。

実際、先輩の言った通りに短期間で日常会話を問題なくこなせるようになったのは、自分でも驚きだった。

それからの私は、アメリカでの仕事が驚くほどスムーズになった。言葉が解るようになったため、相手の思惑が理解しやすくなったのが一番の理由だ。

アメリカでの仕事で一番の成果は、映画に出演できたことだ。

子供向けの冒険モノなのだが、日本への吹き替え板も上映されることが決まった。

そして、その吹き替えで私は自身の役の吹き替えをする事も決まっております、少し不思議な気分だ。

今、私はアメリカでの活動を終えて日本へと帰国する。

日本に帰国したら、先輩は私のマネージャーで無くなるけれど大丈夫。

私と同じように先輩の力を必要とする人がたくさん居るのだから、いつまでも私が先輩を独占するわけには行かない。

こちらでの活動を通じて知り合った人々の助けもあり、事務所のスタッフも充実してきた。

私自身も凜さんから経営とかのやり方を教えて貰い、少しずつではあるが出来ることの幅を広げている。

落ち着いたら、独自ブランドのアイテムとかも作ってみたいと思う。

完二だって、自分の特技を生かしたアイテムの販売をやっている



のだから、私も頑張れば出来るはずだ。

日本に帰国したら、まずは稲羽の皆に会いに行こう。  
今の私を見てもらうために。

2010年07月18日 投稿

久慈川りせ 『飛翔、再び』（後書き）

変換ミスとタグ文の修正を行いました。

こちらの方ではタグが使えないので投稿時には気を付けていたのですが、完全に見落としていました。  
ご報告、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5867m/>

---

PERSONA4 After ～過ぎし刻の足跡～

2011年9月15日01時38分発行